

赤星直忠博士生誕百年を迎えて

大塚 眞 弘

神奈川県内において考古学の地域研究を初めて本格的に行ったと言って過言ではない故赤星直忠博士は、1902（明治35）年4月17日に神奈川県三浦郡豊嶋村中里（現横須賀市上町）で誕生され、この度生誕百年を迎えられる。

赤星直忠博士は1991（平成3）年に亡くなるまでの88年余に及ぶ生存期間の中で最も多く時間を割いたのは言うまでもなく、考古学研究・地域史研究であろう。

私は赤星直忠博士の中に三つの人格を見る。

その一つは研究者である。研究者赤星は限り無く貪欲であった。自分にぶつかる様々な疑問は全て自分で広く学習して総合的に理解しようとした。地域の考古学資料以外の資料（文献資料・民俗資料等）に目を通し、貝塚における自然遺物・石器材質・彩色材料など研究の上に現れた不明な事柄を学問の分野を超えて寝食を忘れ、全て分かろうとした。それは老いても不変であった。そして、探求欲は金銭欲・名誉欲など他の全ての欲を排除した。その結果は、周知のように、博士論文となった横穴・三浦半島地域の遺跡名が冠された型式名が多い縄文土器編年・貝塚・洞穴遺跡・戦跡遺跡など先生の研究キーワードは枚挙にいとまがない。これらの何れをとっても広くかつ深いものであり、

現在においても研究の様々な場面で先生の著作や先生のフィールドノートであるいわゆる「赤星ノート」が参考にされていることでも分かる。

次は武人としてである。尊父が熊本県から海軍の軍人として横須賀に来られ、本人も陸軍に籍を置かれた。特に城郭史研究においては、武人としての発想と知識を生かしての考察をおこなった。

三つ目は教育者である。私が接した赤星直忠博士はほとんど教育者としてであった。私が調査の準備の段階でお邪魔し、自分の調査計画を披瀝し、ご意見を伺うことが幾度かあった。先生はそこで決して私の計画を否定されることは無かった。先生はまず私の考えの長所をいくらかオーバーに評価し、そして足りない点については「こういうことも注意するように。」「こういう可能性も考えておくように。」などと話された。先に同意を得た部分を評価されるので、悪い気はしない。それから、足りない点を指摘するのではなく、同意を得た部分に補充するような話し方で私の至らない点を追加される。それとともに、なぜこれが必要か、いままでの類似の調査研究でどういう点が欠けていたか、調査の場所や周辺がどういうところであるかなどを懇切丁寧に教示され、先生の追加事項を説得力あるものにし、いつの間にかそれら

も私の計画の中に入れてしまう。そして、帰り際に一言「頑張りなさい。」と声をかけていただいた。これは私にとってたいへんに勇気の出る言葉であった。晩年、先生は闘病生活が続いて自由な野外活動が無理になってからは、それに「お願いします。」と言うことばが続いた。この言葉は重かった。私が先生に代わって先生の思いを遂げるように行うことは不可能であろうにこの言葉である。しかし、先生は「お願いします。」と言ってもそれでおしまいではない。発掘調査において不明な事柄が起こると私は「これはたいへんだ。」とあたりかまわず訪ねたり、電話したりして聞きまくる。このような時、健丈な人に現場に来ていただくのでも申し訳無いと思うのに、私の話を聞かれ私と同じ気持ちになって（と私には見えた）直ぐに現場に同行してくれ、指示を授けていただいたことがしばしばだった。これは先生の研究者としての食欲さでもある。

赤星直忠博士はたくさんの研究者を育成され、輩出された。そのファームが横須賀考古学会である。

横須賀考古学会では、先生の没後、先生の学問的意志と業績を学び、これからどのように発展させていったらいいのか、また三浦半島地域の歴史研究の現状と課題は何かを考えた。その過程で、先生の研究業績はあまりにも広く、深く、また調査量の膨大化・研究の細分化など現状も考え合わせ、後の者が赤星スタイルのまねをすることが不可能であろうことを思い知らされた。そこで、地域に散在する歴史上のテーマ毎に研究部会を設け、複数のテーマについて分散して並行して継続的に研究を進めようと言うことで、研究部会を発足させ、現在七つの研究部会が活動している。

この一世紀の間に考古学は長足の進化を遂げてきた。しかし、これを単純に肯定的に見ればいいものでも無かろう。現在では、ほとんどの遺跡発掘調査が土木工事などに伴う「埋蔵文化財発掘調

査」として、学問の進捗に伴う研究目的の有無に拘わらず行われる。また、身銭を切る調査から、それで生計を立てる調査へと変容している。

赤星直忠博士生誕百年のこの年、いままでの考古学研究、そして調査のあり方について、再考する記念年にできればと思う。幸い、先生の研究の主なフィールドであった三浦半島を中心に記念事業が幾つも計画されている。私の耳に入ってきている記念事業・協賛事業を列挙して本稿を閉じる。

- ・横須賀考古学会「研究発表会 赤星考古学の総括と展望」6月16日（日）横須賀市自然・人文博物館（午前10時30分から）
- ・横須賀市自然・人文博物館「（仮称）三浦半島の横穴墓展」10月26日（土）～3月28日（日）横須賀市自然・人文博物館
- ・三浦市教育委員会「（仮称）三浦半島の洞穴遺跡展」11月7日（木）～17日（日）（除11日（月））三浦市南下浦市民センター
- ・横須賀考古学会「三浦半島地区遺跡調査発表会」11月17日（日）三浦市南下浦市民センター
- ・横須賀考古学会「（仮称）赤星直忠博士生誕百年記念展」11月22日（金）～26日（火）横須賀市文化会館第1ギャラリー（会期後、赤星直忠博士記念文化財資料館（横須賀市長坂）で展示）
- ・神奈川県考古学会・横須賀考古学会・横須賀市教育委員会「神奈川県遺跡調査・研究発表会」11月24日（日）横須賀市文化会館
- ・逗子市教育委員会「（仮称）三浦半島のやぐら展」11月25日（月）～29日（金）逗子市役所ロビー（パネル展）、12月前半 逗子市郷土資料館
- ・横須賀考古学会「三浦半島考古学辞典」11月刊行予定

史跡称名寺見学会に参加して

つるべ落としの称名寺

黒田 康子

たまたま戦後、逗子の住人となってから、金沢文庫にはお世話になった。若気の至りで無鉄砲に熊原先生を御訪ねして、先生の貴重なお時間を浪費させた事が今では悔やまれる。山門を入って、文庫の横手を回ると玄関があった。二階立てのコンクリート造りで、階段にも古文書のケースがあった。二階の講義室で何度か、難しくて歯の立たない講義を居眠りをしながら聞いた記憶もある。ここが北条実時の持仏堂称名寺址であるとは……。

今日の午後の見学会に参加して見ようか、そんな呑気な気持ちで出掛けたのが運の尽き、帰りに感想文を書けとの御下命で、目下四苦八苦である。

銀杏落葉を踏んで急ぎ着いた山門前では、点呼が終えていた。参加人員凡そ30人、11月24日午後1時、本日の御案内は横浜市埋文センター鈴木重信先生である。レジメには金沢北条氏と称名寺に関する年表、元亨3年(1323)絵図が載せられ、金堂の西と東の18個のトレンチの写真入りの解説がつき、至れり尽くせりである。主催は「横浜市ふるさと歴史財団」である。平成12年度から3年間の計画で、今年度中に称名寺址、三重塔址、金堂東側の経堂、行堂、雲堂、庫院等の諸施設発掘を完了する予定である。

元亨3年は実時の孫実頭の全盛時代、10年後には彼は16代執権として鎌倉幕府滅亡と運命を共にするのだが……。この時完成した称名寺が絵図として残された。これも金沢文庫のお陰である。現在我々が見る称名寺は、この絵図を基として平成2年に復元した。金沢文庫は寺域の隣の地名「文庫跡」の地を中世迄の発掘を終え、移転した。

北条実時の持仏堂、阿弥陀堂として建てられた称名寺遺跡では、昭和5年の県立金沢文庫の基礎が鎌倉時代の建物の基盤まで達していた事、坑は



二段になって、下の事業層が実時の称名寺で、正嘉2年(1258)以前のものである。ここは苑池に下るらしいスロープが確認された。上の段からは、シルト岩質のブロックが積み上げられ玉石も混じる。ここで出たカワラケは、室町時代のものと鑑定された。ここは、元亨3年、北条実頭再建の称名寺の地盤である。

旧称名寺西側の、北条三代の墓域丘陵の近くから、宝永火山(1708)の焼けたシルト岩塊と火山灰で埋まった井戸が出た。地表から70センチ下の基盤から、宝永スコリアの層が現われ、天和元年の称名寺再建の基盤と分かった。宝永火山灰は逗子では寸(10センチ)積っている。

三重塔址は約30センチ下のシルト岩層に方形や長方形の柱穴があり、北側には玉石が産卵していた。北西部に礎石1個と、南東部の浅い掘込みに、解明不明のシルト岩の集積が現れた。

苑池の北東に回って、段地に立つ。この約1米の高台は、平成称名寺を掘った時の土を置いたもので、元もと谷間の湿地帯である東側の建物址の発掘地はすぐ池状になる為、目下台地徹除と発掘を同時進行だそうだ。大変な事だ。経蔵跡からは上段の事業面に礎石状の列柱が発見された。

「つるべ落とし」という死語の意味を味わい乍ら、陽射しの傾きかけた四時半の称名寺を後にした。中世に遊んだよき一日であった。

赤坂遺跡と赤坂弥生学習室

須田 英 一

1 赤坂遺跡とは

赤坂遺跡は、三浦市最大あるいは三浦半島でも最大の規模を持った弥生時代の集落遺跡です。

遺跡は三浦市初声町三戸字ハタ・丈しが久保、同町下宮田字赤坂・大原と呼ばれる4つの小字の範囲にわたって分布しています。京浜急行線三崎口駅前面を走る国道134号線沿いに南に約300m進むと、国道と直交する通称「御用邸道路」と呼ばれる道路があります。この付近に広がる畑地一帯が赤坂遺跡です。面積は約70,000m²あると考えられています。三浦半島南部において最初に確立した農耕集落であり、分村を持つ親村としての拠点集落と位置付けられています。

さて、赤坂遺跡が世に紹介されたのは、明治31（1898）年に刊行された『日本石器時代人民遺物発見地名表 第2版』（東京帝国大学編）に「相模国三浦郡初声村大字下宮田字飯盛台土器、石鏃、打石斧」とあるのが最初です。

そして、赤星直忠氏が赤坂遺跡の存在を知ったのは昭和4（1929）年のことで、その内容は『赤星ノート』に記されています。それによると、御用邸道路を作る際に、畑を切った断面に竪穴住居址を発見し、あわせて宮ノ台式・久ヶ原式土器を採集しています。

昭和23・24（1948・1949）年には、川上久夫氏らによる試掘調査が行われ、多数の宮ノ台式土器と共に鉄斧が出土しました。昭和41（1966）年には、立教大学博物館学講座による調査が行われ、多数の竪穴住居址が複雑に重複して検出されました。

赤坂遺跡の具体的な範囲、集落址としての内容を明らかにすることを目的として、昭和52（1977）年に三浦市教育委員会と横須賀考古学会は、初め



ての本格的な調査を実施しました。その結果、赤坂遺跡は70,000m²以上の範囲を占める、関東地方においても有数の規模を持つ遺跡であることが判明しました。この調査以降、継続的に個人農地の天地返しや宅地造成などに伴い、小・中規模な調査が行われ、平成13（2001）年10月現在で第20次を数えるに至っています。

2 赤坂弥生学習室

三浦市文化財収蔵庫に保管する赤坂遺跡の発掘出土資料のうち、整理作業の終了した資料を、赤坂遺跡が所在する初声町の三浦市初声市民センター内の一室に常設展示し、市民の皆様に広く公開しています。

この部屋を「赤坂弥生学習室」と名付け、2001年10月に開設しました。弥生時代における赤坂遺跡の重要性を知ると共に、郷土の貴重な文化的財産であることを学習できる場としています。さらに、発掘出土資料の活用を通して、郷土の歴史について理解する上での一助としています。

展示資料は第2～8次調査地点の出土資料、特に内容の豊富な第8次調査地点の資料を中心に展示しています。総数は150点ほどで、内訳は土器・石器・石製品・土製品・植物遺存体・動物遺存体・貝類が中心です。土器は甕・鉢・壺ととりそろえ、石器は大型の抉入石斧・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧など、種類・大きさともバラエティーに富んでいます。動物遺存体・貝類は、弥生時代では珍



しい住居内貝塚出土のものです。

これら出土資料の他に、それぞれの遺物の内容をわかりやすくまとめた解説シートも用意しています。順次増やしてゆく予定です。また、赤坂遺跡の発掘調査報告書をはじめ、市内の遺跡に関する刊行物など、歴史・民俗に関する刊行物も学習室内で自由に閲覧できます。

残念ながら、学習室には担当の職員はおりませんが、事前に連絡を頂ければ、解説に出向きます。

さらに、学習室から徒歩数分の場所にある「三浦市文化財収蔵庫考古資料室」では、縄文時代早期大浦山式土器・三戸式土器・鶴ヶ島台式土器、前期の諸磯式土器など市内標式遺跡の資料をはじめ、弥生時代後期から古墳時代前期の大浦山洞穴・海外洞穴など海蝕洞穴遺跡出土の各種骨角器類を堪能できます。

また、大浦山洞穴・海外洞穴・雨崎洞穴・毘沙門洞穴（神奈川県指定史跡）は、現在も洞穴の中に入って見学することができます。夏でもひんやりしています。

三浦の遺跡見学コースに赤坂弥生学習室を新たに加えて頂ければ、実りある1日になると思います。

案内図



所在地：三浦市初声市民センター1階
三浦市初声町入江200

0468 (88) 6111

交通案内：京浜急行線「三崎口」駅下車徒歩25分、または「三崎口」駅下車京急バス3番線横須賀方面行き「宮田」バス停下車（1つ目、所要4分、170円）徒歩5分

開館時間：午前9時から午後5時まで
休館日：月曜日、年末年始（市民センターに同じ）

観覧料：無料

問い合わせ：三浦市教育委員会社会教育課文化財保護係

〒238-0235 三浦市城山町6-9

0468 (82) 1111 内線412

展覧会情報

・企画展 東へ西へ

律令国家を支えた古代東国の人々

横浜市歴史博物館 045-912-7777

4月16日（土）～5月12日（日）

・海を渡ったアイヌ工芸

英国人医師マンローのみたアイヌの世界

神奈川県立歴史博物館 045-201-0296

7月27日（土）～9月1日（日）

平成13年度考古学講座「かながわの中世～鎌倉から小田原へ」を開催

考古学講座は例年、神奈川県考古学会の年間行事のうち、会員の皆様にご好評をいただいている行事のひとつです。本年度はさる2月24日（日）に神奈川県民センターホールにて約130名の方々の参加を得て開催しました。今回の講座は、初めて中世を時代的なテーマとして選び、中世の土器である“かわらけ”を中心とした土器の様相について、中世の調査・研究の第一線で活躍されている9名の先生方を講師に迎えて開催しました。

神奈川県したでは1986年（昭和61年）に神奈川県考古同人会によって「シンポジウム古代末期から中世における在り系土器の諸問題」（『神奈川県考古』第22号）が開催されて以来、久々、15年ぶりに中世の土器をテーマとしたものになりました。この間、中世都市遺跡鎌倉の発掘調査をはじめ、県内でも多くの中世の遺跡が発掘され、それによって出土した資料も飛躍的に増加しています。反面、中世遺跡の発掘調査例が少ない地域では、そうした資料を年代的にどのあたりの時期に位置付けたらよいか、担当者は苦慮する場合も少なくありません。そうした昨今の状況をふまえ、時代（時期）ごとにかわらけにはどのような特徴があるかということについて、一定の共通理解ができればとの思いから企画されたのが今回の講座の目的でもありました。

河野眞知郎さん（鶴見大学）の趣旨説明をうけて、12世紀末から16世紀までをおおむね100年単位に区分し、12世紀末から13世紀を

齋木秀雄さん（鎌倉考古学研究所）、14世紀を宗臺秀明さん（東国歴史考古学研究所）、15世紀を田代郁夫さん（東国歴史考古学研究所）、16世紀を服部実喜さん（神奈川県教育庁）がそれぞれ担当して発表を行いました。

さらにかわらけの編年と関係の深い貿易陶磁器と国産陶器について馬淵和雄さん（鎌倉考古学研究所）が発表を行い、こうした土器の出土と密接な関係にある村落遺跡の様相について永越信吾さん（葛飾区教育委員会）、中世の城館・茅ヶ崎城について坂本彰さん（横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター）、中世終末期の小田原について佐々木健策さん（小田原市教育委員会）が発表を行い多彩な内容となりました。

また今回は初めて、会場に土器を展示し、休憩時間には参加者が発表で素材として扱われた土器の実物を手にとって観察するコーナーを設けました。当日は発表者、関係者のご配慮により鎌倉、小田原、伊勢原で出土したかわらけが展示され発表者からの説明がありました。報告書や資料集に掲載された実測図だけでは、なかなか理解しにくいかわらけの製作技法上の特徴や胎土、焼成状態





などを理解する恰好の機会として、参加者の評判は上々でした。

今後も会員の皆様に喜ばれるような講座を来年少しも予定しています。こんなテーマを講座で取り上げてほしいといったご意見をお寄せください！たくさんのリクエストをお待ちしています！

なお、今回の考古学講座の資料集は、A4版110ページ、会員500円、会員外1,500円で頒布しています。どうぞご利用ください。（小林康幸）

第25回神奈川県遺跡調査・研究発表会 平塚大会

2001年10月13日（土）平塚市中央公民館において開催された。寺田会長と平塚市社会教育課長の開会挨拶の後、11本の発表と記念講演があった。350人が参加し、『発表要旨集』は完売した。開催にあたり多大な協力をいただいた平塚市教育委員会に感謝申し上げる。

記念講演は、NHK「利家とまつ」で活躍中の俳優の荻谷俊介氏による「卑弥呼は何処に眠っているか」である。氏は冬至の日の出のスライドを撮影されるなど大和・箸墓古墳への深い思い入れを持ち、『まほろばの歌がきこえる』の著書もあるなど考古学への造詣も深く、平塚市にて歴史講座を運営しておられる。安藤文一氏が紹介されたように県内の調査現場や各地の発表会にたびたび登場して顔なじみの友人である。感謝します。

最後に伊東副会長の閉会挨拶で無事終了し、養老の滝平塚店にて多数の参加を得て懇親会を盛り

上げた。2002年度は11月24日（日）に横須賀市文化会館において開催の予定である。

発表

- ・横須賀市打木原遺跡—始良Tn火山灰降灰以前の土坑群の調査—（横須賀市教育委員会佐藤明生氏）
- ・藤沢市No.211遺跡—旧石器時代の石器石材採取・選別地—（慶応大学桜井準也氏）
- ・横浜市稲荷山貝塚—縄文時代後期の貝塚と集落—（かながわ考古学財団松田光太郎氏）
- ・横浜市杉田貝塚—縄文時代中期～晩期にわたる貝層—（杉田貝塚発掘調査団山田仁和本氏）
- ・平塚市真田・北金目遺跡群—平成12年度の調査成果と前方後方型周溝墓—（平塚市真田・北金目遺跡調査会中嶋由紀子氏・渡辺清史氏）
- ・海老名市秋葉山古墳群—関東地方最古級の古墳群・第1号～3号墳の発掘調査—（海老名市教育委員会押方みはる氏）
- ・葉山町三ヶ岡遺跡—砂丘に構築された古墳時代集落と平安時代の製塩遺構—（かながわ考古学財団長谷川厚氏）
- ・小田原市永塚下り畑遺跡—道路遺構を中心に—（下曾我遺跡発掘調査団齋木秀雄氏）
- ・秦野市東田原中丸遺跡—中世の波多野氏居館跡と考えられる建物群—（秦野市教育委員会霜出俊浩氏）
- ・鎌倉市鎌倉大仏周辺の調査—大仏殿遺構を確認—（鎌倉市教育委員会福田誠氏）
- ・横須賀市向井将監正方夫妻の墓（横須賀市教育委員会中三川昇氏）

誌上発表

- ・平塚市構之内遺跡第4地点—古代の道路状遺構—（平塚市教育委員会大野悟氏）
- ・鎌倉市史跡建長寺境内遺跡—客殿建設用地—（鶴見大学史跡建長寺境内発掘調査団宮田眞氏）
- ・平塚市の遺跡概要—平塚の地形と遺跡—（平塚市教育委員会）

考古かながわ 第18～20号目次

第18号 2000年3月31日

明日はわが身…!? 土井永好

長柄・桜山古墳の見学会に参加して 菊川英政

かながわの史跡めぐり かわさき編Part1

東高根遺跡・馬絹古墳・西福寺古墳 服部隆博

最近注目の遺跡 妻木晩田遺跡群 近藤英夫

考古学講座『かながわの古代寺院』を終えて 岡本孝之

第23回 神奈川県遺跡調査・研究発表会が伊勢原市にて開催される 諏訪 慎

第19号 2000年8月31日

振り回されるな! 測定値と真の年代 村澤正弘

総会報告

最近話題の遺跡 埼玉県小鹿坂遺跡 諏訪 順

かながわの史跡めぐり かわさき編Part2

子母口遺跡・影向寺遺跡・市民ミュージアム 村田文夫

見学会から

旅の思い出—何思う蒋介石像— 天野 進

故宮博物院を見学して

信原亜弥・河崎久美子・山本サチ子

建長寺境内調査現場見学会に参加して 川真田桂子

展示会・講演会等情報

新刊紹介『海老名市史1資料編原始・古代』 織笠 昭

会員動向

第20号 2001年3月31日

神奈川県考古学会の機構改革案について 総務担当

第24回神奈川県遺跡調査・研究発表会 加藤信夫

見学会から

岩宿遺跡見学会の感想 磯貝基子

岩宿遺跡見学会に参加して 菅原潤子

私と岩宿遺跡 野川由紀子

「岩宿遺跡」見学会に参加して 鈴木弘太

平成12年度考古学講座「相模野旧石器編年の到達点」が開催される 諏訪 順

かながわの史跡めぐり よこはま編Part1

綱島古墳・市ヶ尾横穴古墳群・稲荷前古墳群 今井康博

特集/前期旧石器時代遺跡のねつ造事件に思う

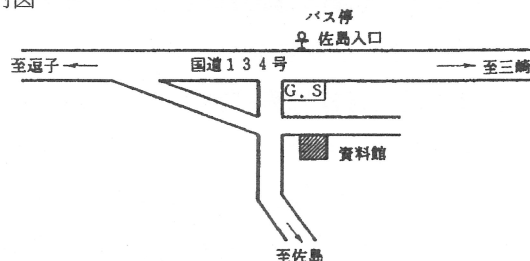
展示会・講演会等情報

刊行物のご案内

会員動向

・赤星直忠博士記念文化財資料館（水曜午後）
横須賀市長坂2-8-12 宇内建設ビル3階
0468-57-7626

案内図



・第12回鎌倉市遺跡調査発表会

鎌倉市中央公民館 8月25日(日)

鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会

2002年度神奈川県考古学会総会のお知らせ

6月8日(土) 9時~12時

かながわ県民センター4階402号室

9時から 総会

10時から トピックス2002

旧石器・縄文：服部隆博氏

(川崎市市民ミュージアム)

弥生・古墳：宍戸信悟氏(かながわ考古学財団)

奈良・平安：依田亮一氏(かながわ考古学財団)

中世・近世：宮田 真氏(鎌倉考古学研究所)

考古かながわ 第23号

発行 神奈川県考古学会

発行日 2002年3月31日

編集者 岡本孝之・近藤英夫・安藤文一・
小林義典・渡辺 務

印刷 (有)湘南グッド

発行者 神奈川県考古学会会長 寺田兼方
〒251-0043

藤沢市辻堂元町4-17-4 やよい荘102
郵便振替 00240-9-71208